

傳五郎夫婦と別れるのは辛かった。

千曲川の左岸を追分に向かう道すがら、頭に浮かんで来るのは老いた二人の顔ばかりだった。

入口を入った瞬間、余りの驚きに声を失った女房の顔を思い出すと、じわりと目頭が熱くなる。

女房に腕を引かれ、裏口から駆け込んできた傳五郎の顔は、まるで怪訝なものを見つめる驚愕の表情だった。

十一年の空白を一瞬で消し去った二人の感激の涙は、嫉捨の新しい想い出となってミチの心に刻まれた。

陽が山の端にかかる頃になって追分宿に入った。目に見えて人家が増え、行きかう人の数も多くなった。

街道沿いに旅籠や商店が軒を連ねるようになって、左手に大きな寺が見えて来た。山門の柱に泉洞寺の名が刻まれている。

惹かれるように、六地藏の前を通って山門をくぐった。両翼を張って高く空に立ち上がった本堂の大屋根が、この寺が盛んであることを語っていた。

本堂に向かう時には気付かなかったが、手を合わせて引き返す石畳の左手、鐘楼の脇に人影があった。

笠を背中に旅姿の女がしゃがんで、向かい合った男の子に

しきりに話しかけている。

男の子は俯いたまま時折うなずいているが、うなずくだけで何も喋っている様子はなかった。

男の子の後ろには、武家の家族らしいかなり年のいった女が両手を子供の肩に乗せて立っている。祖母のようだ。

通りすがりにそれとなく窺うと、旅姿の女は時折涙をぬぐっているように見えた。

のつぴきならない用で出かける母と子が、しばしの別れを惜しんでいる、といった光景だった。

山あいの町の、しかも秋の日暮れは早い。山門を抜けると街道は既に夕暮れの色に変わっていた。あわただしく軒行燈に灯を入れる人の姿も見える。

ミチは今夜の宿を求め、泉洞寺を出て歩く先に初めに目に止まった旅籠に宿をたのんだ。

振り向いた女中が、生憎今日は一杯なのでこの先の旅籠にたのんでみてくれ、と言った。おやおや、と思いつながら言われた通り次の旅籠に頼んでみたが、そこも一杯だった。

日和が良いのにこんなに早くから宿がふさがるのはどういふわけなのだろう。今夜は宿無しかな？と少し不安だったが、三軒目の宿で、床を掃いていた女中が客に大きな尻を向けたまま無愛想な声で「どうぞ」と返事をした。

通りを歩き交う人の流れを目で追い、ゆっくりわらじの紐を解いているところに、先ほど泉洞寺の境内で見かけた旅姿

の女が入って来た。

「今日はもう空きはありませんよ。申し訳ありませんね」と面倒臭そうに断られている。ミチと同じように、ここまでの二軒の旅籠に断られたのだろう。

「これから先にはもう旅籠は無いでしょ、何とかありませんか？」

「分去れ(わかされ)の西に沢山ありますよ」と相変わらず無愛想である。

「分かっています。私は坂本に行くのでこれから引き返したくないのですが大部屋も空いていませんか？大部屋が無ければ相部屋でも」

相部屋と言われて女中はちらっとミチを見た。

「そうは言われてもねェ大部屋は男の泊客で一杯だし……」と言いながらもう一度ちらっとミチを見た。

「どうぞ、私なら構いませんよ」

ミチがそう言うが無愛想な顔が急に緩んで

「あらそうですか？お客さんよかったですね。」と言っておいて

「今どき相部屋を承知してくれる人なんて滅多にありませんよ。」と、少しばかりミチを持ち上げた。

部屋に入ると女は、カンナ、と名乗った。

「私は菊舎といます。カンナさんですか、いいお名前ですわね」

「いい名前なんかじゃありませんよ。女ばかり四人姉妹の四番目で、男の子が欲しかった父親が、次々に女ばかり生まれるので、もういい加減にここで完了だっというので完。でもそれでは流石に女の子には可哀そうだと思ったのか、な、を足して、カンナ、になったのだそうです。どうでもいい子なのです」

「どうでもいいという事はないでしょうが、先ほど、泉洞寺の境内でお見かけしたのはあなたの子供さんですか？」

「あら、見られていましたか。ええそうです、私の子供なのですが……」

女はそこまで言いかけて、うつと言葉をつまらせ、俯いて目頭を押さえた。

「良くないことを言ってしまったようですね。申し訳ありません」

「いえ、そうではありません。あの子のことを思うと辛くて、一年間ずっと泣いていました」

「でも、ご用がお済になって、旅から戻られたら……そうか、変ですね。旅立つ人がいきなり旅籠に泊まるはずはありませんね。ということは、カンナさんが何処からか追分に來られた、ということですね」

「そうです。坂本から一年振りに追分に來ました。碓氷峠を越えた先の宿場ですけどね。」

実は今日が、去年亡くなった夫の一周忌なのです。たった

の三十二歳でした。何でこんなに早く死ななきゃいけないの
でしょうね」

涙で濡れた顔を上げ視線を遠くに投げたまま、カンナは泉
洞寺で子供と別れた訳を話した。

八年前の夏、まだカンナの夫になる以前の篠田源三郎は、
江戸でのお役を終え追分に戻る途中だった。

高崎に到着した日は、二日も降り続いた雨が止んで午後にな
って照り始めた真夏の太陽が、草木の葉に残る雨粒を蒸発
させ、道の水たまりを沸騰させた。

その所為で皮膚に触れる空気が、ヤカンの湯気に顔を突っ
込んでいるようにねっとり絡みついてきた。

宿の障子を開け放つてみても、一扇の涼味どころか、ぬる
りとした空気の塊が、下帯ひとつの裸に纏わりついて眠れぬ
夜になった。

明け方近くなつてやつと眠ったようだった。だけど、目が
覚めた時には慌てて肌掛けを探さなければいけないほど空
気は冷えていた。

喉が痛かった。それほど急いでいる訳でも無かったのだが、
そのまま次の宿場、坂本に向かった。次第に体がだるく熱っ
ぽくなるのが分かった。

足が鉛のワラジを履いているように重い。その上呼吸も苦
しく、肩で息をするようになった。

坂本の旅籠、にたどり着いた時は、僅か二寸ほどの高さし
か無い敷居をまたぐのもやつとだった。

二日も高熱を出して寝た。全く食欲がなかったが、食べな
ければ何時までも良くならない、と言って、食事の度にやか
ましく付きつ切りで箸を取らせたのがカンナだった。

カンナは、深谷の大王の娘だった。十三の年から坂本の旅
籠、佐野屋に奉公に出された。

荒い仕事をいとわなだけでではない、客のあしらいも上手
く良く気が働く性格が主人に気に入られ、僅か十九歳で五人
いる女中のまとめ役として働いていた。

敷居をまたいだ侍の異変に気付いたカンナは小走りに侍
に駆け寄ると、ためらうこと無く脇の下に腕を差し入れ、柱
にもたれてぼんやり突っ立っている大年増のカネを呼んだ。

「カネさん、手を貸して下さい！」

二人掛かりで侍を上がり框に腰をかけさせ、わらじを解い
て足を洗った。

「かたじけない」を繰り返す篠田源三郎を部屋に担ぎ入れ
ておいて、カンナはすぐに医者の手配をした。

忙しく宿の一階から二階まで限なく目を届かせ、合間には
忘れずに源三郎の額の手拭を冷たいものに取り替えた。その
気働きに源三郎はひどく心を動かされた。

三日目の朝にはすっかり熱は下がって食欲も出た。少しゆ
っくり出立しても日暮れまでには追分に入ることが出来る。

そうするつもりで一度旅支度にとりかかったが、考えを変えた。出立を翌日に延ばし、部屋の中で一日中寝たり起きたりしながら、所在なく過ごした。

退屈していた訳ではない。体を休めている風を装って、宿の空気が人の動きをじっと観察していた。

もっと正確に言えば、カンナが働く気配に目を凝らし、耳を澄ましていた。

その日、夕食を運んで来たカンナに源三郎は全く唐突に「カンナ殿、少しばかりお願いの儀が有るゆえ聞いていただきたい」と言った。

「はいはい、私にお願いとは一体何でしょうね」

「私の嫁になっていただきたい」

「はあ？まだお熱がおありですか？」

「いやいや、拙者真面目にお願いをしておる。このたび、はからずもカンナ殿のお世話になることになり、あなたの人となりは良くわかった。あなたを置いて他に私は嫁をめとるつもりは無い。すぐにとは言いません。ふた月後にもう一度こちらへ参ります。それまでにしつかり気持ちを固めておいていただきたい」

驚いたのがカンナである。泊り客から冷やかashiで、嫁にならないか、と言われたことは何度も有る。

しかし、こともあるうにお侍からいきなり嫁になれと言われても返事のしようが無い。カンナにすれば天と地が逆立ち

をしたような衝撃だった。

いい加減な話だと思われては困ると言って、宿の主人にも話を伝えて篠田源三郎は追分へ帰って行った。

驚いたのはカンナだけではなかった。源三郎の両親、特に父親は、何処の馬の骨だか分らないばかりか旅籠の女中などもつての外、と眉間に青筋を立てて激昂した。

だが、日頃父親に逆らうことなど無かった源三郎だったが、ことカンナに関しては頑として父親のいう事に貸す耳を持たなかった。

しぶしぶ折れたのは父親のほうだった。一旦遠い親戚の養女に迎え、そこから嫁入りする形で世間の面目を保とうとした。

カンナも、源三郎の一途さにほだされ、ままよという、半ば賭けにも似た気持ちで嫁入りを承知した。

嫁入つてみると、源三郎のまことは瞬く間にカンナの心を捉え、一生の伴侶として申し分ないと思えるようになった。

だが、面白くないのは父親だった。息子夫婦と一緒に食卓を囲むのさえ嫌がった。

それでもカンナは幸せだった。義父母に無視をされても、筋の通らない叱責を受けても嫌な顔を見せること無く、毎日が明るく過ごせるよう懸命に義父母に尽した。

源三郎はそんなカンナを労わって、休みの日などは出来るだけ外に連れ出した。

芝居が掛かれればたまには見物をすることもあったが、殆どは川筋を辿って季節の花を探したり、寺や神社を巡る程度の他愛の無い時間を過ごした。

そのどれもが、カンナにとっては何物にも代えられない大切に幸福な時間だった。

子供を身ごもったと判った日、カンナに向き合った源三郎は、カンナの肩に両手を置き「よし！」と言って、また「よし！」と言った。

何度も何度も繰り返して、見渡す限りの青空のように晴れやかな顔で喜びを爆発させた。

それなのに、子供が四歳になった春、代官のお供で鷹狩に出掛けた原で、猪の姿に驚いた馬が立ち上がり、はずみで落馬した源三郎は首の骨を折り呆気なく死んでしまった。

もともとカンナの嫁入りに大反対だった義父は、源三郎の初七日が終わると四十九日を待つこともなく、カンナに去り状を渡した。子供は置いて行け、という。

カンナはせめて子供に会う機会だけでも与えて欲しいと頼んだ。だが、義父は許さなかった。

源三郎が居なくなつた後は、今は四歳だがやがてこの子が家督を継ぐことになる。男の子さえいれば篠田家は安泰。

もはや、何処の馬の骨だか分らない女に用は無い。いや、むしろそんな女が篠田家を継ぐ孫に近づいてもらつては困るのだ。

五年余りを過ごした篠田家を出て行くカンナに義母がそつとささやいた。

「一周忌は自宅ではなく檀那寺の泉洞寺にします。主人が何とおうとそうします」

源三郎が亡くなつた今、女親が子供に寄せる思いは義母にも痛いほど分かる。

自宅には近づけなくても寺であれば我が子の姿を見ることが出来るだろう。義母の最初で最後の思い遣りだった。

武家の妻から元の旅籠の女中に戻ったカンナは源三郎一周忌の日、日が変わつて間も無い八つ(午前二時頃)に坂本を出ると、碓氷峠の急坂を一気に越え、五里の道を歩いて追分にやつて来た。

昼間は仕事に追われているので余り思い出すこともなく過ごせるのだが、夜になって自分の床に潜り込むと息子が思い出されて仕方がない。

考えると辛くなるので思い出すまいとするのに、夜具に横になつた途端目の前に息子が現れる。だけど不思議なことにもいつも声は聞こえなかった。

義父に叱られて泣いてはいないだろうか。義母のいう事を聞いているだろうか。病氣になどなっていないか。近所の子にいじめられてはいないだろうか。

心配をし始めると終わりが無かった。無理に他の事を考えようとするのだが、駄目だった。

泣いた顔、笑った顔、ことに湯川に三人で釣りに出かけ、大きなウグイを釣り上げた時の得意げな顔、どれもがたまらなく愛しい。

つないだ手の柔らかな感触と温もりは、今でもこの掌に鮮やかに残っている。

会いたい。会って抱きしめて、もう一度あの子の温もりを確かめたい。もう一度あの子を抱きしめることが出来るなら、きつと諦めることが出来る。いえ、諦める！

夜ごとく自問を繰り返して、一周忌の今日まで泣かない日は一日も無かった。いつたいカンナの夜具は、どれほどの量の涙を吸い込んだことだろう。

今日はやっと我が子に会える。

鐘楼の傍で法要が終わるのをじっと待っているカンナの胸は、一年振りに賢一郎の顔を見ることが出来る期待ではち切れそうだった。

胸が苦しくて、身体が小刻みに震えているのが分る。緊張で掌が汗ばんで来た。

やがて本堂の扉が開き、参列者が出て来た。どの顔も五年余りの源三郎との暮らしの中で見知った親類の顔ばかりである。

そのどの顔も、鐘楼の傍に立つカンナに気づくと、ふっとバツの悪い顔をそむけたり、少しだけ頭を下げてそそくさと

通り過ぎた。

特に義父は、あからさまに不快な一瞥をカンナに投げつけ、大股で目の前を過ぎて行った。

最後に義母に手を引かれて賢一郎が出て来た。カンナが来ている事を予測した義母の気遣いだった。黙ったまま息子の肩に両の手を置いて、鐘楼へ誘導して来た。

賢一郎と目が合った。一瞬驚いた表情を浮かべ、何かおうと口が動いたようだった。だが、すぐに俯いてしまった。

「賢一郎、元気でしたか？」

とカンナが問うと、うなずくだけで俯いたままである。カンナは、顔を合せた瞬間、賢一郎が泣いて抱きついて来たらどうしよう、と心配だった。

多分そうなるだろうと思ひ、慰める言葉を色々考えていた。顔を合せただけで又直ぐに別れなければならぬ。それをどのように納得させればいいのか、カンナはここに来るまでにそればかり考えて歩いた。なのに、そうならなかった。

何を言ってもうなずくだけである。顔を覗こうとすると一層深く俯いて、カンナの目からののがれようとした。

ひどい動揺がカンナを襲った。何故息子賢一郎は、母親の顔を見ようとしなのだろう。何を言ってもうなずくだけで、少しも話しをしようとしなかった。

一年間母親と離れて暮らして寂しかったはずなのに、どうして私の胸に飛び込んでくれない。どうして私の顔を見

てくれないのだろう。

そして気付いた。これは義父の洗脳にちがいない。もっと言えば脅しなのかもしれない。

カンナはそこまで話して改めてミチに顔を向けると

「初めに目が合った時に驚いた顔で何か言いそうになったのは、母上と言いかけたようでした。

私が目の前に現れたのは予期しない出来事で、気持ちの準備が出来ていなかったのです。ですから思わず口から母上と出そうになった言葉を慌てて止めたのです。

日頃、母親のことを口にしたり恋しい素振りをすれば、きっと義父にきつく叱られているに違いないのです。」

「辛いお話ですね。これからカンナさんはどうなさるつもりですか？」

「今日子供に会ったことで終わりにします。私が子供に会おうとすればするほど、賢一郎が困るということがよく分かりました。

一年間涙に暮れていましたが、今日を限りにきっぱりと諦めます。明日からは身も心も旅籠の女中に戻り、昔のように一生懸命勤めます」

「追分と坂本はそんなに遠くありませんね。あと十年もすれば賢一郎さんも一人前。母親に会いたくなって自分の意思で訪ねて来ることも夢ではありませんよ」

「そうですね。自分の意思で会いに来てくれるのなら誰もとめられませぬね。その時を楽しみに待ちます。

源三郎さまとの五年余りの忘れられない暮らしも、賢一郎との楽しかった思い出も、私のような身分の女には過ぎた夢だったのです。

すべて天の配剤なのです。悲しいけど私はそれに従います」

カンナはそう言って少し笑った顔をミチに向けた。その目にもう涙はなかった。

笑顔は寂しそうだったが、その裏には、一年間泣き暮らした揚句に辿り着いたカンナの決意も確かに見えていた。

子別れの辛い話が、古びた旅籠の小さな部屋で語られている。

他の誰も気づくことが無いその時間を含め、追分の宿場に今日という一日が終わろうとしていた。